

筑波大学博士（文学）号請求論文

題目：シェイクスピアとジェンダー 驚異と領有：ジェンダーの驚き

氏名：浜名 恵美

論文の概要

・本論の目的と特色

本論はシェイクスピア研究の一環である。シェイクスピア研究を介して、今日のジェンダー・バイアスを是正するための装置を仮説的に提起し、さらにその仮説的装置を使ってシェイクスピアのテキストの読み直しを試みる。その仮説とは、従来、フェミニズム批評やジェンダー研究が、発想することのなかった驚異論の思考枠をアプロプリエイト（領有）し、「ジェンダーは驚きとして作用する」ということである。

ジェンダーは、一般に、文化的、社会的、歴史的に構築されたものだという認識がすでにあり、「男らしさ」や「女らしさ」の規範は、時代と文化の展開に対応して変化している。そうしたジェンダーが、意識的であれ無意識的であれ、固定的な決めつけや偏見として作用する場合、それがジェンダー・バイアスと呼ばれている。ジェンダー研究の目的は、第一にジェンダーそのものの理解を深めることにあり、第二に、その深化にもとづき現代のジェンダー・バイアスを是正し、ジェンダーにかかわっておこる不当な差別や排除を正す運動を展開することにある。本論は、こうした認識にたち、ジェンダーの規定の問題をあつかうのではなく、ジェンダーが現実にもどのように作用しているか、または作用していたのかという実際的な問題に関与している。この問題意識から、エリザベス朝期のシェイクスピアのテキストをとおして、ジェンダーの作用を考察してみると、ジェンダーが「驚き」として作用していたことに気づかされた。この認識にもとづいて仮説を提起し、それが正当なものであることを論証しようとした。ジェンダーは驚きとして作用するという考えがこれまで皆無であったとはいえないとしても、本格的に提唱されたことはない。したがって、本論は、ジェンダーは驚きとして作用するという統一的視点からシェイクスピアを代表とする近代初期イングランド文化を解明する最初の試みのひとつとなる。

本論は、シェイクスピア研究の分野で、別個に展開されてきたジェンダー研究と驚異研究を接合するところに独自性がある。いかにその接合が妥当なものをジェンダー研究と驚異研究の概観をとおして行い、その過程で提示されたそれぞれの研究領域の資料の分析と整理は、従来の錯綜した研究の様相にひとつのまとまった概観を提供することになったのではないかと思う。ジェンダー研究と驚異研究の接合を全うできたとはいえないが、その理論枠で分析されたシェイクスピアの詩と演劇のテキストは、新たな理論枠によって読み直され、新しい洞察を示すことができたつもりである。

・本論の構成

本論は三部で構成されている。第一部は理論部、第二部はインターフェイス、第三部はシェイクスピアの詩と演劇のテキスト分析である。第一部では、ジェンダー研究と驚異研究を接合し、そこから仮説を提唱し、第二部と第三部でその検証をする形態をとっている。

第一部第一章では、ジェンダー研究が概観され、規定ではなく作用を考察する構築主義の立場をとるという姿勢を表明し、第二章では、シェイクスピア演劇がジェンダーの演劇性に立脚したことを改めて確認し、それがいかに今日的な意味をもつかを論じている。第三章では、本論の実践的戦略となる「領有(アプロプリエーション)」の意義を説明したあと、いかにシェイクスピアのテキストが現代の関心と深い関連性をもっているかを示す。第四章では、驚異研究を概観してから、近代初期イングランドとシェイクスピアのテキストに見られる主に女性性に関する言説が、矛盾と多様性を特徴としていることを示し、この状況の理解に、スティーヴン・グリーンブラット著『驚異と占有:新世界の驚き(Marvelous Possessions: The Wonder of the New World)』(1991年)で提示された驚異なるものの表象体系が有益な枠組みとなり、「ジェンダーが驚きとして当時作用していた」という仮説を提唱する。

第二部第五章は、第一部の理論部と第三部のテキスト分析の実践をつなぐインターフェイスとなっていて、処女女王エリザベスの表象、とくにウォルター・ローリーの『ギアナの発見』における植民地言説で、ジェンダーがいかに驚きとして作用していたかを検証する。

第三部では、シェイクスピアの詩と演劇のテキストの主に女性表象をとりあげ、仮説の正当性をさらに論証していく。ジェンダーの驚きに関連したテーマとテキストは多数あるが、そのなかから本論では、以下のものを精選した。第六章では、「ダーク・レイディ・ソネット集」をとりあげ、ジェンダーの対概念であるセクシュアリティについて分析し、「性交は驚き」であると主張する。第七章では、異性装を駆使している喜劇『お気に召すまま』をとりあげ、誤認と真実の暴露、差異と同一性の交換と融合を筋とする状況では、ジェンダーが驚きとしてきわめて効果的に作用することを解明する。第八章では、『ハムレット』のヒロインで狂気に陥ったオフィーリアの身体を考察の対象とし、彼女の女性的身体が「身体化された精神」という驚きを表象し、多様で矛盾した衝動と現実の全体性を構築するイリュージョンをもたらす「驚きの身体」となっていることを解明する。さらに、第九章では、『アントニーとクレオパトラ』をとりあげ、クレオパトラは、西洋が自己を確立するために必要とした、ジェンダーと人種の両方の軸での他者であり、「オリエントの女性化」が見られることを明らかにし、このようにジェンダー構築に深層で関与している幻想は驚きであると論じる。

第三部では、以上のように、詩と演劇の四つのテキストを主にとりあげる。従来、驚異研究の視点からは、ジェイムズ朝に書かれた後期ロマンス劇が特権的地位を占めてきた。本論では、むしろ他のジャンルのテキストに見られる女性表象に焦点を合わせ、ジェンダ

一の驚きの表れ方と意味を探求することを試みているが、それは仮説の適用範囲を拡張できることを証明するためである。

最後に、本論は、現在でも執拗に存続しているジェンダーについて根源的に考え直すために、近代初期のシェイクスピアのテキストは有効なテキストでありつづけると予測する。それは、ジェンダー研究では従来分析枠として考慮されることのなかった、驚異とジェンダーが接木されているからである。